

池鯉鮒の馬市について

<馬市のはじまり>

池鯉鮒の「馬市」について記した文献の早期のものに、万治3年(1660)頃成立の浅井了意著『東海道名所記』があり、「毎年4月のうちは馬市あり」と記されています。当時すでに池鯉鮒では「馬市」が毎年開かれるものであったようです。また山町の記録『山町永代帳』には、慈眼寺にある万治元年(1658)銘の鱧口が、馬喰(牛馬の売買や周旋をする人)共が寄付したものであると記され、『東海道名所記』の記述と時期が重なります。同記録にはまた、馬市は木綿市を契機として始まった、とも記されています。池鯉鮒の木綿市については、元禄5年(1692)に松尾芭蕉が「不断たつ池鯉鮒の宿の木綿市^{*}」と詠んでいます(現在この句碑が知立神社にあります)。



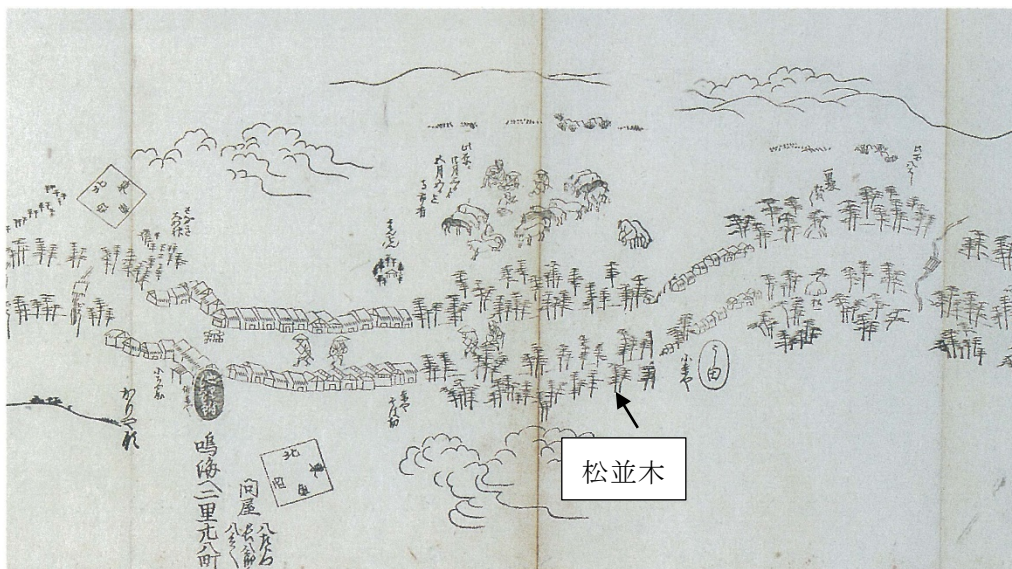
歌川広重 保永堂版 東海道五十三次 池鯉鮒 首夏馬市

これらのことから池鯉鮒の馬市のはじまりは、少なくとも1600年代、江戸時代初期にさかのぼることができます。しかし、万葉集の「引馬野の歌」が詠まれた場所は知立であるという説や、貞応2年(1223)の紀行文『海道記』には池鯉鮒に馬場があったことを示す記述もあること等から、もっと以前から馬市は開かれていたと可能性も考えられます。

^{*}「不断たつ」とは絶え間なく市がたっているという意味です。そう表現するほどに木綿市は盛んに開かれていたようで、『東海道名所図会』によれば、その木綿は江戸では「池付白」として知られていました。また元禄宝永(1688~1711)の頃までは、池鯉鮒宿には春夏秋冬、さまざまな市がたち、大変賑わっていたようです。

<馬市の場所>

馬市の開かれている場所を示す最もわかりやすい絵図が下図の「東海道分間絵図 卷之四」(江戸中期)です。池鯉鮒宿の東、松並木の北側に広がる原っぱに、多くの馬が集まっている様子が描かれています。



慈

池鯉鮒

寛政9年(1797)刊行の『東海道名所図会』には、馬市の場所は「駅の東の野」と書かれ、野の中には「桜

の馬場」という桜の多い場所があったことや、馬喰らが集まって馬の値段を決める場所を「談合松」といっ
たとする記述がみえます。その場所を推測する資料に、文化3年（1806）に成立した「東海道分間延絵図」

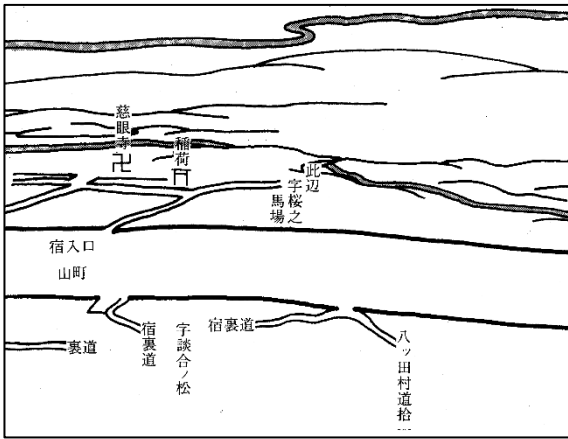
（東京国立博物館所蔵・重文）があります。

池鯉鮒宿の東の東海道を挟んで、北側に「字桜之馬場」、南側に「字談合ノ松」という地名が書かれています。この2つの絵図からは、馬市は池鯉鮒宿の東に広がる野で開かれ、東海道を挟んで北側をより中心としつつも、南側にも馬市の会場は広がっていたと考えることもできます。

また馬市が江戸時代以前から開かれていたとする説では、中世以前、鎌倉街道が主な往来であった頃は、北の鎌倉街道により近い方で開かれ、東海道が主要道になるにつれて南へ移動したのではないかと考えられています。

『東海道分間延絵図 解説編』(東京美術)より

(は本プリント筆者による)



<馬市の開催時期>

江戸時代の馬市の開催時期は少しずつ変化があったようです。1700年以前に成立した文献には4月中、4月3日から5月5日、4月の祭りの後から5月5日など、4月を中心にした開催時期を示すものが多いのですが、1700年代以降に成立した文献の多くは、4月25日あるいは4月下旬から5月5日、また5月1日から10日間など、多くが4月末からの開催を示しています。一般にいわれている「4月25日から5月5日」というのは、一般旅行者も増えた江戸後期に、より実用的な名所案内として刊行された『東海道名所図会』に書かれていたことによっています。

<馬市の様子>

最盛期には4~500頭の馬が野につながれていたといえます。馬喰たちは談合松の下で値段交渉をし、その方法は右図のように袖の中に手を入れて、他の者にわからないように指を握りあって値を伝えていたようです。また馬市には馬喰だけでなく、種々雑多な商人たちがやってきて、各地の名産品などさまざまな店を広げ、役者や芸人、遊女などまで集まってそれぞれの商売をしていました。そのため池鯉鮒宿中が賑わっていたといえます。しかし人が集まれば騒ぎも起きます。そうした際の取締りにと、慈眼寺の南西にあった馬市番所には、管轄の藩である刈谷藩の役人が詰めていましたが、その役人が芝居見物をして楽しんでしまい、大目玉をくらったという例もあったようです。



秋里籬島著『東海道名所図会』

「池鯉鮒」の項 馬市の図より一部分



<明治以降の馬市>

明治になると、盛況だった馬市も徐々に衰退し、会場も東の野から慈眼寺境内へと移っていきました。その後、条例の発布などにより馬市は「家畜市場」として名称も開催方法も内容も変わりましたが、戦争の影響で市場が閉鎖するまで人々は、親しみをもって「馬市」と呼び続けました。

明治末年頃の馬市の風景